

ブルーデイズー青の
日々ー

闇鬼光夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

皆さんにとって『恋』とは何色ですか？

青春っていうぐらいだから、青色なんですかね？

中には赤とか黄色とか、他の色もあるでしょう。

そんな青春が急遽始まったら貴方はどうしますか？

教育実習生と実習先の生徒との禁断の愛が今育まれようとしている、、、

目次

ただいま	1
まさかのー選択分岐ー	5
まさかのーー分岐ルートーー	10

ただいま

俺の名前は桜坂クロヤ。大学4年の21歳だ。

俺は、教師を目指している。そして、明日から教育実習な訳だが、

クロヤ「はあ、」

まさか、実家から近い学校とは思わなかったな。

女子校みたいだけど上手くやれると良いな。

とりあえず、実家帰ろ、。

クロヤ「ついたー、、久しぶりやな、、」

全然変わってないなあ、、そりや4年ではなんもかわらんやろ。いかんいかん、自分に自分でツッコんでしまった。

クロヤ「ただいまー」

家に入る俺。ただいまと告げると奥からおかえりという声と足音が聞こえる。

母「おかえりなさい、全く帰ってくるなら連絡ぐらいしなさい！」

クロヤ「ごめん、忘れてた」

母「全くもう！」

まで、帰ってきて即効で叱られるって何、、、

母「今度は気を付けなさいね」

クロヤ「分かった」

俺は家に入り、自分の部屋へと向かう。

クロヤ「この部屋に来るのも4年ぶりか、、、」

なかなか感慨深いな。

てか、腹減ったな。

クロヤ「そういや、もう18時か」

スーパでも行くかな。部屋を出て玄関へ向かう。

母「あら、どこ行くの？」

クロヤ「スーパー」

母「そう、、、」

母さんは何か考え込んでいるようだ。

クロヤ「なんかあるのか？」

母「いやね？アンタさ、近所の子と仲良かったじゃない？だから、、、」

クロヤ「いや、引越越しじゃないんだから挨拶行かんやろ」

母「帰ってきたら教えてって、言われてて」

クロヤ「、分かったよ、お店でお菓子とか買って挨拶行ってくるよ」

母「物わかり良く育てて母さん嬉しいわ！」

クロヤ「いつてきます」

母「いつてらっしゃい」

家を出てスーパーへ向かう。

クロヤ「お菓子売り場はつ、と、、ん？」

この店、ゲーセンあるやん、久々にやるかな

なんのゲームをしようかな（ダンダン）なんの音だ!?

なんか、紫髪の子が台パンしてる、、

あつ、店員に連れてかれた。

こつち見た。目が合った。うわ、知り合いだ。知らない振りしとこ。

俺は、ゲームを楽しんだ。買い物も忘れなかったぞ。

買い物も終わり帰ろうとした俺に、店員が声を掛けてきた。

店員「すいません、ちよつと良いですか？」

クロヤ「なんですか？」

万引きとか疑われたのか？それとも、レジミス？

店員「実は先ほどゲームコーナーで台パン行為を行っていた女性を、事務所に連れて

行っただんですがね」

クロヤ「はあ」

店員「それで、その子が貴方が保護者だと言いつ張るので、一緒に事務所に来ていただいてもよろしいですか？」

クロヤ「良いですよ」

店員「ありがとうございます。ご案内します」

店員に連れられ事務所に入ると、そこに居たのは、

まさかのー選択分岐ー

社員に案内され事務所に入ると、そこには紫髪の子が居た。

??「あつ、桜坂さ、、んつ、ん、兄さん」

なぜ言い直した？この子は、、あつ、保護者代わりだから怪しまれないようにか。

職員「お兄さんですか？」

クロヤ「まあ、はい」

職員「実はですね、、カクカクシカジカということなんです」

クロヤ「そういうことでしたか」

長いので要約するが、要はこのゲーセンの違反行為の1つである台パン行為をこの子がやってしまったため、出禁にする。ということだった。

クロヤ「そういうことなら大変申し訳ありませんでした」

俺は頭を下げる。

クロヤ「魂子も謝れ」

俺は魂子の頭も一緒に下げる。

クロヤ「本当すいませんでした!!」

とりあえずそこから、出禁の書類へのサインと謝罪をし、事務所をあとにした。

魂子「ごめんなさい、謝らせちゃって」

クロヤ「いいよ、別に」

魂子はシユンと俯く。俺は気づくと右手を魂子へ伸ばし

魂子「んっ、／／／」

頭を撫でていた、

魂子「あの、兄さん？／／／」

クロヤ「ん？」

魂子「手っ、恥ずかしい／／／」

クロヤ「あつ、ああ、悪い」

俺は手をどける。

魂子「あつ、」

クロヤ「どうした？」

魂子「なんでもない」

どうしたんだ？こいつは、てか

クロヤ「なあ、なんで兄さんって呼ぶの？」

魂子「家が近所で幼なじみ、それで年上だから兄さん呼びが普通かな？」と

普通じゃねえだろ、、

魂子「それで？このあとは？」

クロヤ「家に帰る」

魂子「じゃあ、一緒に帰ろ！」

えっ、、どうする、、

—————分岐ルートです—————

帰る方向は一緒だけど、、

1：一緒に帰る

2：一人で帰る

1を選んだ方はこのままお進み下さい。

2を選んだ方は次の話へ進んで下さい。

—————

クロヤ「ああ、一緒に帰ろう」

魂子「やった」

クロヤ「お菓子は買ってやらないからな」

魂子「お寿司」

クロヤ「ダメ」

魂子「ラーメン」

クロヤ「夕飯前だぞ」

魂子「から揚げ！」

クロヤ「太るぞ」

魂子「はっ？ドスツ」

クロヤ「グフツ」

こいつ殴りやがった、こ

魂子「全くデリカシーがないな」

クロヤ「悪かったな」

魂子「別にー」

そんなたわいもない話をしながら家に着く。

魂子の家は俺の家の右隣だ。

クロヤ「ついでにおじさんとおばさんに挨拶してくか」

魂子「そんな、挨拶だなんて、／／／」

何言ってるんだ？

そうこうしていると玄関に魂子の父と母が現れた。

魂子父「おう、お隣の桜坂さん家の息子さんかい」

魂子母「まあまあ、大きくなつて！」

クロヤ「ご無沙汰してます」

魂子母「ほら上がって上がって」

クロヤ「いえ、今日は挨拶だけなので」

魂子父「ほら、そんなこと言わないで」

魂子母「今、お茶入れてくるわね」

クロヤ「あつ、ちよつ、」

魂子「ここまで来たら断れないだろうし上がったら？」

クロヤ「わーつたよ」

まあ、10分ぐらいで出れば他も挨拶行けるだろ

と思つてた時期が私にもありました。

結果、お酒を飲まされてしまった俺は22時まで動けず魂子の家にしか挨拶に行けなかつた。

魂子の好感度が10上がった

まさかのー分岐ルートー

クロヤ「ごめん、予定あるし一人で帰るわ」

魂子「えっ、、、そう、、、シユン」

なんか、泣きそうだなこいつ、、、

クロヤ「大丈夫か？」

魂子「うん、大丈夫大丈夫」

クロヤ「本当か？」

魂子「本当だよ、それじゃーねー」

あいつは走って帰った。別に挨拶有るから一緒に帰っても良かったかもな。

俺は一人で帰路に着く。

家の近くまで来ると、幼なじみがいる家がある。

俺の家の右隣と左隣、あの向かい側に1軒ずつだ。

クロヤ「とりあえず、向かい↓左隣↓右隣の順で行くか」

まずは、向かい側の家に行きチャイムを押す。

??? 「はい」

扉が開きそこに居たのは、

あかり「あれ？お兄ちゃん!!どうしたの？久しぶりじゃないですかー!!」
赤い髪とカメラがトレードマークの石狩あかりが、

クロヤ「ああ、久しぶり、元気してたか？」

あかり「うん！」

因みにこいつは、よく顔が良いと言われているが俺もそう思う。

クロヤ「とりあえず久々に帰ってきたから、挨拶だけ」

あかり「うん！それじゃーねー」

クロヤ「おう！」

次は左隣の家へ向かう。

同じようにチャイムを鳴らし人を待つ。

???「はーい」

扉から元気よく出てきたのは、

夏希「お兄ちゃん！お帰りなさい!!」

こいつ、飛びついて来やがった、

クロヤ「なあ、夏希痛いから飛びつくな」

夏希「やだ！」

クロヤ「全くこいつは、」

夏希「ねえ、お兄ちゃん!!」

クロヤ「なんだ?」

夏希「彼女できたー?」

クロヤ「できてねえよ」

夏希「だよねー」

クロヤ「なんだてめえ」

夏希「婿に行き遅れたら私が貰ってあげるよ」

クロヤ「ああ、ありがとよ!」

そして、最後に右隣の家に向かった。

そこに住んでるのは、言わなくても分かるよね?

そう、

クロヤ「音霊魂子だ」

チャイムを押す、が、誰も出てこない

クロヤ「なあ」

魂子「なんですか?」

クロヤ「チャイム越しに話すの止めね?」

魂子「分かった、」

魂子はそう言うのと玄関から出てきた。

魂子「ねえ、兄さん」

クロヤ「なんだい？魂子」

魂子「予定、有るって言ってたよね？」

クロヤ「この挨拶が予定だぞ？」

魂子「なら！一緒に帰っても良かったじゃん!!」

クロヤ「そう言われても」

だって、魂子の親父さん話長いから多分今日じゃ挨拶終わらなくなっちゃうしな、
とは言わない

クロヤ「悪かったよ、」

魂子「今度は一緒に帰ろうね？」

クロヤ「できたらな」

魂子「それは断り文句だよ」

クロヤ「そうか？」

二人は笑い合った、懐かしいなこの感覚。

皆と再会できてとても嬉しいな。

そんな幸せな気持ちのまま俺は家に帰りベッドに横になった。
皆の好感度が5ずつ上がりました。

――